詩集「愁ひの実」を出してまもなく、先生の方からお祝いのお言葉を頂いた。

「今日は市電の車中で貴君の詩集を読んでいる人を見かけてうれしく存じました。いい本ができましたね。本学からも一人ぐらいは詩人が出てもいいと存じました。」とのお便りに、ぼくはすすんで先生に献本しなかった理由を見つけて恐縮する弱気を取り戻した。今度は勤め先の（学校だけはサボラないようにしなさいね。）といわれることが辛かったのである。それに今度は大学と違って、ぼくは時々学校をサボルだけでなく、二度も、案の定、学校をやめては京都で一度、東京で一度、放浪生活、居候生活を繰り返し、妻子を置き去りにする悪癖が一応納まったかと思うと、今の学校（県立奈良商工高校）に八年も落ち着いたものの、やっぱり時たま、気ずい気ままのルンペン癖が出てきては周囲を困らせ呆れされる台風が心から体を荒らして吹き抜ける始末である。

こんなものをお目にかけると先生にはいつまでも御心配の種になるばかりだが、不肖のぼくにはこれが精いっぱいのところである。

今ぼくは国語の乙で堤中納言物語をやっている。先生の評釈をたよりに、うまくいけばいくで、グッと詰まれば詰まるで、一層先生がなつかしい。そしてサンボウカンの頃がなつかしい。それにしても思えば思うほど先生にあわす顔のないことばかりである。気ままがタタって左眼の焦点はあわなくなり、毒舌の天罰で前歯を欠き、不惑を越したばかりにもかかわらずぼくは老いた。ぼくが老いると自分の気ままは棚に上げ、あつかましいウヌボレから自分を推して先生の頽齢を察するという無礼な暗算が働きかける。これは逆縁の凶兆であろう。願わくはそうあってほしい。いつまでも先生がお元気であると安心して、ぼくの方がお先へ失礼したいと思われる。

「若い時分には、こう見えても血気盛んで、これで随分ケンカもしたことがありました。」と講義のあいまに聞いた先生の想い出話が想い出になる。十八のもの昔の話。清水中納言物語のロマンスを聞きのがしたことだけが、時代からといはいながら、今にして想えば千載に悔いが残る一大痛恨事である。

朝日新聞の「生活のうた」がキッカケとなって、ぼくは今、地元の大和タイムスに今年いっぱいの予定で「くらしのうた」を書いている。この連載が終ると単行本になる手筈だが、今度は地方紙という特殊事情は別として、日々の明け暮れに追われる一喜一憂を、小説家志望後日談報告代りに進んで御一読願いたいと甘えたくなる。

サンボウカンから始まった先生とのつながりは、ぼくにおいて、先生のお気持を曇らせる結果となったが、ぼくにはあの、サンボウカンの淡い甘みが、無味乾燥の時代の甘露として、ともすればヒズミがちな暗い世相に押しひしがれてきた中でも、負けながら惜しみたいもののあわれの香気を放ってくれる。

清水先生の思い出

滝　典通

烏兎匆々などいう言葉が漸く実感となる年齢になった。清水先生の還暦祝いがつい此の間であったと思うのに、早くも定年御退職とのこと。私が先生に教えを受けた頃は、あの悪夢のような戦いの終盤であった。先生はその頃文学部長をなさっていられ、後藤先生や

今や故き小泉先生と共に、はげしい食糧の中でともすれば失われ勝ちになる我々の学生の学問への情熱をもえ立たせて下さった。今でもはっきり眼に浮ぶのは、同窓の辻正一、森下幸男両君が応召した時、先生が涙をたたえて激励なさった恩顔である。戦いが熾烈を極めた頃、私は勤務校の児童に付添って、香川県綾歌郡の白峯御陵の麓松山村に集団疎開し、そこで卒業論文を書いた。その頃先生と後藤先生の御二人が白峯に一度行くから案内せよとのことで、心待ちに楽しんでいたが、それも相次ぐ空襲で実現されずにしまった。今でも残念に思っている。

私自身は卒業後京都に帰り健文社に勤めて大学の研究科に籍を置き、戸田茂睡の論文を書いたりしていたので、先生に引きつづいて種々御指導を仰いだ。田中野神町の御宅へも何回か御邪魔した。乏しい戦後の食糧事情の中で、配給のビールの御馳走になったりした。その後私は家の都合で郷里に帰り高等学校に奉職し、以来十数年貧乏暇なしで先生に御拝眉の機を得ない。その間、小泉先生は追放で去られ、後藤先生も又大阪学芸大に転ぜられた。文字通り立命館学部の支柱となって後進の持導に生涯を捧げられた先生が、いよいよ定年御退職なさることは我々にとって誠に感慨無量である。私は先生がいつまでも御健康で、堤中納言物語などの特色ある御研究に裕々御余生を楽しまれることをお祈りして止まない。同時に、かって果さなかった白峯行に是非機を見て、後藤先生と御一緒にお誘い致し度いと念願している。

清水泰先生のこと

妹尾　権

この春、恩師清水泰先生が立命を去られた時、私には一入感慨深いものがあった。

戦後、私の郷里に大学が新設され、この文学部主任教授として赴任されるという新聞を読んで、先生のお宅へ伺ってその話をした時、先生は立命を決して去らないという御意志の堅さに、いかに立命を愛されていられるかを思い知らされたのである。

思えば、その時の御意志のままに、三十四年の長い年月をひたすら立命のために尽くされながら、しかも、その業績は、ひとえに立命内にとどまることなく、日本の国文学会に大きく寄与された、偉大なわれらの清水先生を、母校立命から失うことは、何としても残り惜しいことであった。

考えてみれば、卒業生にとって学校とはおかしなところで、母校という感じだけあっても、年が経つに従い恩師が去り、校舎が変り、そこに誰一人知らぬ者ばかりとなれば、現実にはやはり異郷の感はまぬかれない。私にとって、母校立命は清水先生と共にあった。身勝手な言い分ながら先生のいられない立命は、考えられないと言っても過言ではない。その清水先生が立命を去られたのである。

国文学界における堤中納言物語の権威者としての先生は、私の言を俟つまでもなく、余りに著名であろう。

先生のすぐれた識見は、この堤中納言が平安時代から鎌倉時代にかけての文学作品中、源氏・枕と共にすぐれた作品として挙げたい旨「詳解」に書いておられる。また、王朝の文学は、結構の大であり、行文の優雅典麗であり、構想の奇抜なもののなかにあって、こ

の堤中納言物語は、それぞれ固有の光沢色彩を放つ宝石の、宝石笥にたとえられている。特に「虫めづる姫君」については、その評釈の中で、人間はややもすると、時代というきずなに自分がゆがめられ、流されようとする。その中にあって、人間本来の姿を持ちこたえ、伸ばそうとする者に、大きな拍手を送っていられることを読みとらずにはいられない。

このことは、古典を学ぶ者の大切な心のあり方であり、立場であろう。古典は歴史学者の史実の資料供給源として、あるいは用語や習慣の知的収穫のみに終らず、それが現代のわれわれに新しい意義と新しい問題を提供してくれるゆえに価値あるものとしたら、この堤中納言物語が、王朝文学の最たるものであっても不思議はないのではないか。そこに着目され、人間本来の精神に触れようとされた先生の偉大さに、私は頭を下げる以外にないなのである。東洋的・日本的臭気を抜き取って、世界の文学と肩を並べられる作品も、また、この作品であるというと言い過ぎであろうか。

先生は温厚な方であった。常に平静に自己を保ち、大声で学生を叱咤したり、取り乱されることの決してない。穏かな方であった。学者としての実力と、人間としての最高の品格を兼ね備えられた立派な美しい先生であった。

時に先生のお宅を伺って、頭のめぐりのよくない私が、勝手な気焔をあげ、つまらぬ駄弁を弄しても、先生は御自分の持論を無理に押しつけようとなさらぬばかりか、少しの軽侮の様子も見られず、あれかこれかと親が子に対する、あの無報酬の作業と同様に、適当にほめ、適当たしなめながら、ゆっくりと子の成長を見るように、研究の手がかりを示してくださったのである。にもかかわらず不肖の教え子は一向に先生の御厚意に応えようとせず、遂に郷里で、平々凡々の田舎教師になり下ってしまった。

しかし、先生に教えを受けることによって、先生の常に人間としての真実、学問に対する崇高な情熱間近に知り得て、その僅かたりともわが身となし得たことは、私の終生忘れることのできない誇りであり、倖せであった。

幸い先生には御家族に恵まれ、三人のお子様も、それぞれ御自分の道に御精励御活躍のことであり、後顧の憂いなき先生の、ますます御自愛くだされ、学問の道を私たちのために拓かれくださる同時に、不肖の教え子のよき父、よき師として一層の叱正と御教導をお願い申し上げるものである。

× × ×